

今日の默想のてびき

週日聖書日課 イザヤ書6：1～13
2025年12月13日(土)

◆文脈と言葉

—イザヤの独白による、預言者としての召命の記事です。イザヤは預言者として召しを受けますが、その預言は民には聞かれません。南王国ユダは滅びることがすでにここで語られます。徹底的な滅びの末になお、残りのものが与えられる救いも預言されています。

一天の御座の幻の中、セラフィムのひとりとイザヤの対話が繰り広げられます。

◆默想のすじみち

(1)あらすじと説き明かし

一天にある御座から裾が神殿いっぱいにひろがることで、天と地上の神殿を結び合わせています。今や、神殿の入口が揺れ動き、煙で満たされ(4節)、天におられる神が神殿にいるイザヤのところに顕現なさいます。

—イザヤは聖なる神の顕現に接して、滅ぼされるほかない自分の汚れと、また民全体の汚れを告白します。けれども、セラフィムのひとり(セラフ)が祭壇の済を唇に触れさせてことで、咎は取り去られ、罪は赦されます。

—清められたイザヤは、主の「誰を(預言者として)遣わそうか」という問いに、すぐさま「わたしをお遣わしください」と答えます。神によって清められ、イザヤは預言者としての召命に応えました。

—けれども、主の言葉は理解されず、悟られず、民は心をかたくなにする、と語られます。それは「悔い改めていやされることのないように」とまるで主ご自身がそうなさるかのような衝撃の言葉です。人間の罪の深さ、重さが正面から受け止められているのでしょう。

—イザヤは人々がかたくなのはいつまででしょうかと反論しますが、それは王国ユダの徹底的な破壊と、人々が連れ去られるまでという絶望的なものでした。

—最後には神が救ってくださるという希望の部分だけをみて、滅びを招く罪を決して軽くみてはならないでしょう。けれども、残りの十分の一すらも焼き尽くされる徹底した滅びの中に切り株が残り、それた種となり、民が復興するという希望が語られます。

—人が神の言葉を聞かず、滅びへ向かう姿は福音書にも受け継がれます。主イエスがたとえて語られても、やはり人々は理解しなかったのです(マタイによる福音書 13:14、マルコ 4:12、ルカ 8:10)。人間の罪の極みである十字架が起こり、残りのものなどないかのように思えますが、そこから神は御子を復活させられ、まことの神の民が興されます。